

Fisher and Aguinis (2017) における理論の精緻化

土屋 佑介[†]、久保 雄一郎^{††}
林 部 由 香^{††}、吉 崎 雅 浩^{††}

Theory Elaboration in Fisher and Aguinis (2017)

TSUCHIYA Yusuke, KUBO Yuichiro
HAYASHIBE Yuka, YOSHIZAKI Masahiro

Abstract

The purpose of this article is to propose guidelines for qualitative research by organizing the discussion of Fisher and Aguinis (2017) who proposed an elaboration of the theory, and to offer a categorization of previous studies in Japanese management. First, we explain the three approaches and seven tactics underlying theoretical contributions, the decision-making process concluding in the adoption of discrimination, the elaboration of theory from theory generation to theory testing, and the six research conditions that situate problem consciousness. Next, we examine nine award-winning qualitative studies published in Japanese academic journals and offer a classification table we created. The trends observed are discussed. Finally, three points to be noted are mentioned when employing theory elaboration.

キーワード：理論の精緻化、アプローチと戦術、意思決定プロセス、研究状況

Key words：Theory Elaboration, Approach and Tactics, Decision Process, Research Context

1. はじめに

質的研究については、量的研究と比較すると調査方法や手順に柔軟性がある一方で、優れた質的研究は「名人芸」と呼ばれ、真似することができずに、研究の体系化や蓄積が進まないことがある。研究の体系化や蓄積が進まない原因の1つには、グラウンデッド・セオリー・アプローチ (grounded theory approach: GTA) が抱える理論構築の方法が挙

[†] 大阪産業大学 経営学部経営学科 准教授

^{††} 神戸大学大学院経営学研究科 博士課程後期課程

草稿提出日 11月15日

最終原稿提出日 12月24日

げられる。この原因は第1筆者が以前の論考で言及したように、GTAが研究者に対して、新しい理論を生み出すために既存研究に依拠しないよう戒める一方、広く知れ渡った既存研究を基にした理論的感受性も要求しているということだ(土屋・大野・辺見・田村, 2021)。加えて、GTAを基にした研究では、調査内容は理解できるが、理論的に「So what?」という問いを向けられやすくなる問題もある。この原因は、調査で得たデータ、もしくは既存研究に寄り過ぎる結果、既存研究への貢献が見出しにくくなるために生じる。

上述のGTAの問題に対する解決策として、推論形式の1つであるアブダクションを基にした分析であるアブダクティブ分析がある(Timmermans & Tavory, 2012; Tavory & Timmermans, 2019)。アブダクティブ分析は、驚くべき発見事実から既存研究における問題点の発見および説明困難な事実を説明する説明仮説の構築を行う分析方法である。しかしながら、土屋・大野・辺見・田村(2021)が最後に注意点を述べたように、驚くべき発見や既存研究に適合しない結果を重視することで、ケースの分析において重要なパターンや規則性を軽視することにもつながるかもしれない。さらに、Bamberger and Ang (2016)が「アブダクションは、その性質上…(中略)…所見から理論を蒸留しようとすることに過度に寛容である」(p. 4)と批判するように、既存研究に対していかに新奇性を打ち出していくのかというプロセスについては、明示されているわけではない。

そこで本研究は、理論の精緻化を提案したFisher and Aguinis (2017)の議論を整理し、彼らのアイデアを基に日本の経営学の先行研究を分類することで、質的研究のガイドラインを提案することを目的とする¹。以上の目的に基づき、本研究は以下の構成を取る。まず、Fisher and Aguinis (2017)における理論的貢献を生み出す3つのアプローチと7つの戦術、理論生成や理論検証との弁別と理論の精緻化を採用するまでの意思決定プロセス、および問題意識を位置づける6つの研究状況を解説する。次に解説を基に、『組織科学』と『日本経営学会誌』の学会賞受賞論文のうち質的研究9本を取り上げて研究状況や戦術に関する分類表を作成し、傾向を考察する。最後に、理論の精緻化を用いる際に注意する点を3点言及する。以上を通じて、理論を前進させる方法としてアブダクションを使用するための実行可能で具体的な一連のガイドライン、すなわち日本の経営学の工具箱に加えるガイドラインを提供する点で、本研究は意義を持つといえる。

¹ 本研究は、Fisher and Aguinis (2017)の整理検討を土屋・久保・林部・吉崎が行ったものである。当該論文の忠実な要約ではないのでご注意いただきたい。したがって、本研究を引用する場合には「土屋・久保・林部・吉崎(2022)によれば、Fisher and Aguinis (2017)は…」あるいは「Fisher and Aguinis (2017)は、…(土屋・久保・林部・吉崎, 2022)」のように明記されることを推奨する。

2. 理論の精緻化の解説

2-1. 理論の精緻化とそれ以外の弁別

Fisher and Aguinis (2017) では、理論の精緻化について、帰納的理論の生成と演繹的理論の生成に分かれる理論生成と理論検証との弁別について言及することから始めている。帰納的理論の生成とは、説明されていない現象から始まり、データに基づいて新しい構成や関係性を導き出すことを指す。一方の演繹的理論の生成とは、十分に根拠のある議論を用いて新しい構成や関係性を導き出すことを指す。最後の理論検証とは、まず既存の理論から導き出された形式的な仮説を用意し、仮説を支持する証拠となりうるデータを収集、分析し、仮説の採択または棄却を可能にすることを指す。

対して理論の精緻化は、現象を部分的に説明する既存の概念とモデルから始め、既存の概念とモデルを使用して、データを収集、整理する。次に、既存の理論を洗練させるために、理論的な構成と関係性を対比したり、概念を詳しく記述したり、構造化したりする。最後に、より正確に文脈的要因、構成要素、および/または関係性を説明することを目指す方法である。以上の弁別内容をまとめたのが図表1である。

	理論生成	理論検証	理論精緻化
イン プット	説明できない現象; 既存理論がほとんどない	既存理論から導かれた 公式的な仮説	部分的に説明できる現象; 既存の概念モデルや アイデア
プロセス と戦術	データから構成要素や 関係性を導き出したり、 論理的で理にかなった 議論を用いて新しい概念や 関係性を開発・導出 したりする	データを収集・分析して、 仮説を立てた関係を 裏付ける証拠が提供 されているかどうかを 評価する	既存の理論を洗練させる ために、既存の概念と モデルを使用してデータを 収集し、整理することで、 理論的な構成と関係を 対比、特定、構造化する
アウト プット	新たに検証可能な命題; 新概念	既存理論から導かれた 仮説の採択もしくは棄却	既存の理論的なアイデアの 洗練; 文脈的要因、構成、 および/または関係の 洗練

図表1. 理論の生成、理論の検証、理論の精緻化との弁別

出所) Fisher & Aguinis (2017, p. 442) を基に筆者作成

2-2. 理論の精緻化の3つのアプローチと7つの戦術

Fisher and Aguinis (2017) は、既存理論や概念の何を向上させる必要があるのかについて、Bacharach (1989) の理論評価枠組みにおける5つの形態を基に説明している。そのため、以下ではBacharach (1989) の5つの形態を説明することにしよう。

1つ目は概念妥当性の向上であり、構成要素がより明確に定義され、類似の構成要素と区別できるように強化された構成要素を特定することを指している。2つ目は、焦点の明確化であり、構成要素の範囲が十分に問題の現象を反映するように適切に捉えることを指す。3つ目は論理的妥当性の向上であり、関係の暗黙的または明示的論理が明確に規定されることを指す。4つ目は経験的妥当性の向上であり、関係が組織の現実をよりよく反映することを意味する。5つ目が説明的かつ予測的妥当性の向上であり、理論的な関係がより正確に興味のある結果を説明したり、予測したりすることができるという形態である。以上の形態に沿って、彼らは3つの実施アプローチと7つの戦術を分類している(図表2)。

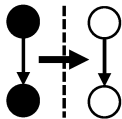
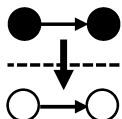

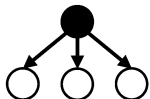
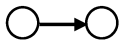
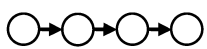

第1に、理論の精緻化における対比 (contrasting) アプローチである。これは、3つ目の論理的妥当性と4つ目の経験的妥当性を向上させるために、異なる設定で理論を比較するアプローチである。理論は多くの場合、特定の文脈におけるデータから帰納的に生み出されるか、あらかじめ設定された文脈を条件として演繹的に展開されている。その理論を発展させるために、既存の文脈やレベルと自らの研究で取り上げる文脈やレベルとを対比し、理論のどの要素が同じように機能するか、どの要素が異なって機能するかを検討することが重要となる。この対比について Fisher and Aguinis (2017) は、水平方向 (horizontal) と垂直方向 (vertical) に分けて説明している。水平的対比は、すでにある理論が生み出された文脈とは異なる文脈にどのように適合するかを検討する戦術である。この際、分析のレベル (e.g., 個人、チーム、組織) を統一して、異なる文脈間で比較することが有用であるとしている。一方の垂直的対比は、ある分析レベルで構成や関係を説明するために開発された理論を、別のレベルで構成や関係を説明するために収集されたデータと比較する戦術である。

第2に、概念の詳述 (construct specification) アプローチである。これは、1つ目の概念妥当性と2つ目の焦点の明確化を向上させるために、より正確に経験的な現実を反映するように理論を新たに作り出したり広範な概念を細分化して下位概念に分解したりするアプローチである。概念の詳述アプローチについて彼らは、新たな詳述 (new specifications) と概念の分離 (construct splitting) に分けて説明している。新たな詳述は、これまで既存の理論では考慮されていなかった概念を特定し、定義する戦術である。概念

とは、経験的な世界で近似されたり、観察されたりする理論的な単位である。これまで明確にされていなかった構成を特定し定義することで、現実を正確に描写する新たな理論を生み出すことが目的となる。一方の概念の分離は、既存の概念を特定の次元に分割して、それらの概念の様々な要素を正確に描写する戦術である。いわゆる「オッカムの剃刀」の原則にあるように、研究者は必要最低限の理論的説明を可能にするために、広範な理論を提案し、開発することがある。ある1つの概念が現実にもどのようにあてはまるのかを検討し、仮に2つ以上の次元に分割されている場合、概念妥当性と焦点の明確化を向上させることができるようになる。

第3に、構造化 (structuring) アプローチである。これは、5つ目の説明的かつ予測的妥当性の向上を目的として、理論的關係がより正確に経験的観察と一致するように、理論的關係を記述し、説明するアプローチである。構造化アプローチについて彼らは、特有の關係 (specific relation structures)、順序關係 (sequence structures)、または再帰的關係 (recursive structures) に分けて説明している。

特有の關係は、以前に記述されていない構成要素間の特定の關係を特定して記述したり、既知の關係の根底にあるメカニズムを特定して記述したりする戦術である。基本的に研究者は、2つまたはそれ以上の概念の關係に焦点を当てるものの、その際に關係のメカニズムが明確ではない場合がある。特有の關係を基にすれば、研究者が既存の理論を基に、以前は不明確であった概念間の關係を特定したり、既知のメカニズムを分解したりすることが可能になるのだ。順序關係は、結果につながる一連の概念間の時間的な順序づけを説明する戦術である。順序關係を説明する研究を行うことは、一般的には複雑で困難である。だが、時間的な順序づけを検討することで、時間的な相互作用と主要な結果変数への影響を検証するのに有用な戦術となる。再帰的關係は、異なる概念間の再帰的相互作用を考慮して記述することで、理論を発展させる戦術である。Fisher and Aguinis (2017) によれば、2つの構成要素間の反復的な相互作用によって何が起こるかを検討することは少なく、概念間の關係の再帰的な性質はあまり理解されていなかったり、無視されていたりすることも多いという。したがって、この戦術によって、2つまたはそれ以上の概念が時間をかけて繰り返し相互作用することで、關係がどのように発展し、進化するかを調べるための研究を設計し、実施するための基礎となり得ると指摘している。

実施 アプローチと 特有の戦術	グラフィカルな 表現	基本的な特徴	研究実施例	既存理論の 発展目的
対比				
水平的 対比		異なる文脈での 観察を対比する	Maguire, Hardy, and Lawrence (2004); Greenwood and Suddaby (2006)	論理的かつ 経験的な 妥当性の向上
垂直的 対比		異なる分析レベル の観察を対比する	Tripsas and Gavetti (2000)	
概念の詳述				
新たな詳述		新概念を 特定し、定義する	Bechky (2003); Gioia and Chittipeddi (1991)	概念妥当性と 焦点の向上
概念の分離		広範な概念を 特定の概念に 分解する必要性を 特定する	Maitlis (2005); Ely and Thomas (2001)	
構造化				
特有の関係		2つの概念の 関係の 定義 / 再定義	Greenwood and Suddaby (2006); Shane (2000); Weick (1993)	
順序関係		出来事や関係の 順序に関する 説明を与える	Edmondson, Bohmer, and Pisano (2001); Gioia and Chittipeddi (1991)	説明的かつ 予測的 妥当性の向上
再帰的關係		2つ以上の実体の 反復的な相互作用 に関する再帰的 関係を説明する	Tripsas and Gavetti (2000)	

図表2. 理論の精緻化研究の実施方法：実施アプローチと戦術

出所) Fisher & Aguinis (2017, p. 445) を基に筆者作成²

² 本研究では、Fisher and Aguinis (2017) に基づいて図表を作成している。そのため、本文中で言及しない研究実施例にある文献に関しては、引用論文として取り扱わない。研究実施例にある文献を参照する際は、Fisher and Aguinis (2017) の引用文献から参照されたい。

2-3. 理論の精緻化を適用する際の意味決定プロセス

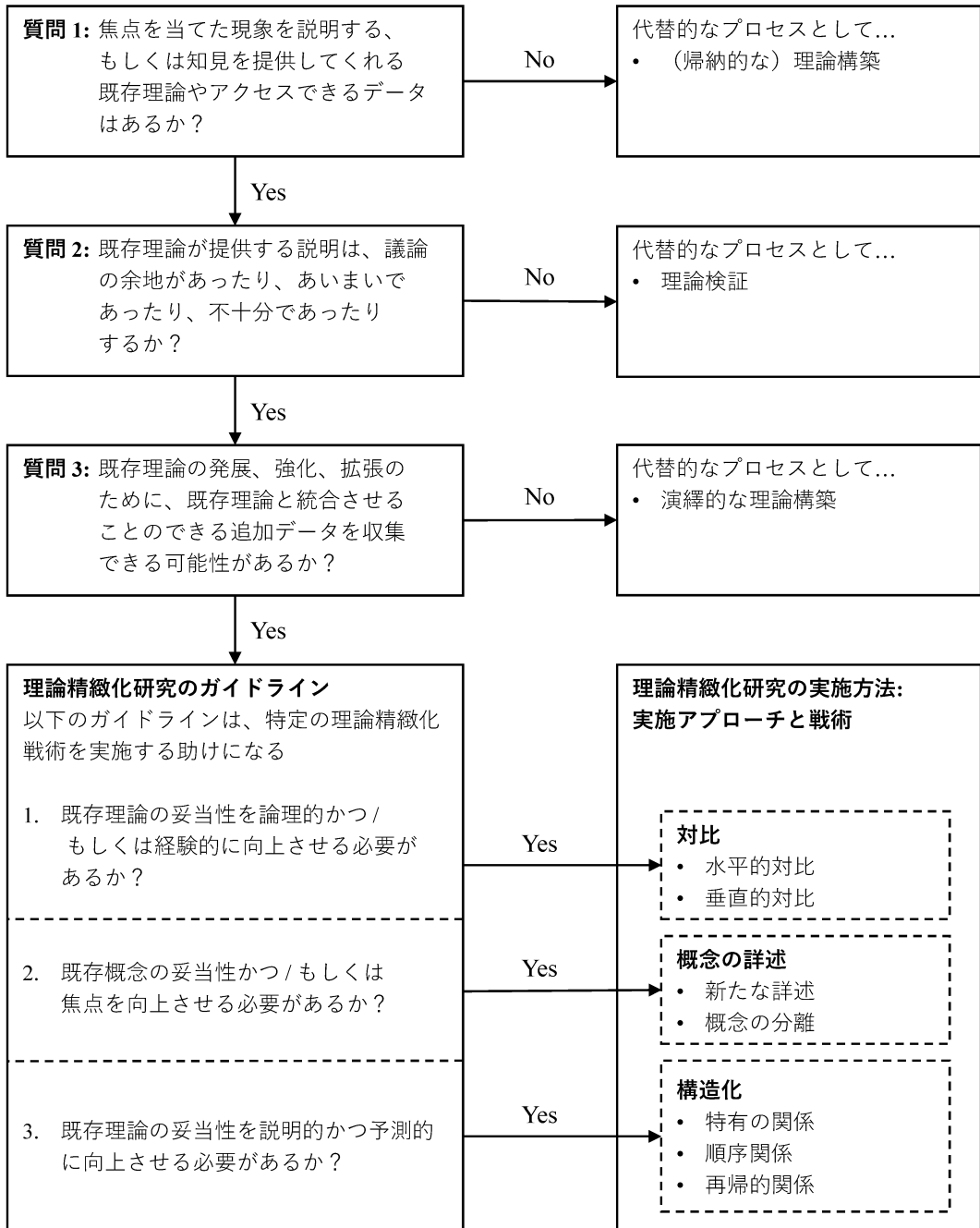
続いて Fisher and Aguinis (2017) では、理論の精緻化を適用する際に、どのような意思決定プロセスを経ているのかを図示している (図表3)。3つの質問全てに該当する場合に理論の精緻化が採用され、既存理論や概念の何を向上させる必要があるのかで、実施アプローチと戦術が変化している。

まず問いかけるのは「焦点を当てた現象を説明する、もしくは知見を提供してくれる既存理論やアクセスできるデータはあるか？」(p. 450) である。理論の精緻化は、既存の概念的なアイデアや予備的なモデルを出発点として使用する。したがって、最初の決定ポイントは、関心のある現象を分析・理解するための基礎となりうる理論がどの程度存在するか、また、その現象を評価するために使用できるデータにアクセスできるかどうかを確認するために、包括的な文献レビューを実施する必要があるかである。もし、関心のある問題に関連するデータを分析するための基礎となりそうな理論がない場合や、何が起きているかを評価するためのデータにアクセスすることが難しいか不可能な場合は、帰納的な理論構築が適切なアプローチとなる。一方で、既存のデータを分類したり、焦点となる関係やプロセスを説明するための基礎となりうる既存の理論があったり、焦点となる関係やプロセスを評価するためのデータにアクセスできる可能性があったりする場合には、質問2に移行することができる。

次に問いかけるのは「既存理論が提供する説明は、議論の余地があったり、あいまいであったり、不十分であったりするか？」(p. 452) である。理論の精緻化は、先に述べた対比、概念の詳述、構造化というアプローチに分類される。このように、関心のある現象が、それを説明する上で何らかの理論的論争やあいまいさ、あるいは不十分さを伴わない場合には、理論検証の方が適切である。この場合、既存の理論を基に仮説を演繹的に展開し、検証することができる。一方で、既存の理論に何らかの論争、あいまいさ、不十分さがある場合には、質問3に移行することができる。

最後に問いかけるのは「既存理論の発展、強化、拡張のために、既存理論と統合させることのできる追加データを収集できる可能性があるか？」(p. 452) である。理論の展開には、概念的・経験的なものと、帰納的・演繹的なものの二重の焦点がある。したがって、例えば、新しいデータが帰納的な理論化につながる可能性が低いような研究状況であれば、研究者は純粋に演繹的な理論構築を採用する必要がある。一方、帰納的・演繹的な理論化を両方とも可能にするような新しいデータを収集する可能性がある場合には、理論の精緻化により、既存の理論を発展させることが妥当である。これによって、より正確に新しいデータを説明するための新たな理論について対比、概念の詳述、構造化といったアプロー

チを用いることができるだろう。



図表3. 理論精緻化の適用に関する意思決定プロセス

出所) Fisher & Aguinis (2017, p. 451) を基に筆者作成

2-4. 理論の精緻化が採用される6つの研究状況

Fisher and Aguinis (2017) では、理論の精緻化が必要とされて問題意識が生じる研究状況について、創発理論 (emergent theory)、新しい文脈 (new contexts)、理論の借用 (theory borrowing)、クロスレベル効果 (cross-level effects)、理論的矛盾 (theory contradictions)、理論の逆転 (theory reversals) の6つを挙げて解説している (図表4)。

1つ目の創発理論とは、理論的な視点が未発達でまだ生まれつつある状況である。理論が最初に開発される時、いくつかの側面は不明確であるかもしれない。理論の精緻化の視点は、経験的な設定から収集されたデータがどのように新しい理論に適合するかを分析し、評価し、理論の側面がどのように洗練され、適応され、強化されるかを評価するのに使用することができる。2つ目の新しい文脈とは、組織や個人が活動する際の新しい文脈や既存の文脈が変化した状況である。このような状況では、研究者は既存の理論がどの程度適用されているかを理解しようとし、新しい文脈に合わせて理論をどのように変更する必要があるかを検討することができる。

3つ目の理論の借用とは、理論を別の研究領域や別の分析レベルから借りることである。もちろん、理論が他の分野から借用されたり、異なるレベルの分析を経て移転されたりすると、その理論の新しい文脈への適用可能性や、その文脈における妥当性が疑問視されることがある (Whetten, Felin, & King, 2009)。そのため研究者は、理論をどのように変更し、新しい文脈に適応させる必要があるかを慎重に検討する必要がある。しかし、上記の疑問を乗り越えることができれば、理論を精緻化する機会を生み出すことができるのである。4つ目のクロスレベル効果とは、異なる分析レベルの変数が互いに実質的な相互作用をしているように見える状況を指している。もちろん、このような相互作用はしばしば複雑であり、概念化や分析が困難である。しかしながら経営学の研究では、例えば、業界、カテゴリー、組織、部門、職場、個人といった様々な分析レベルが存在し、それらを同じ分析レベルで分析するだけでなく、異なる分析レベルを横断して変数間の相互作用を検討することも理論の精緻化にとって有益な機会となる。

5つ目の理論的矛盾とは、ある結果を説明するメカニズムや構成要素について、相反する結果が存在することである。これは、同じ理論が異なる結果をもたらす場合や、同じ結果を説明するために異なる理論的メカニズムが主張されている場合に起こる。このような状況では、研究者は既存の概念的枠組みを利用した綿密な研究を行う必要があるものの、複数のタイプのデータを収集・分析して問題に近づくことで、研究者は既存の理論がなぜ矛盾した結果を出すのかを詳しく説明することができ、それによって既存の理論を強化・発展させることができるかもしれない。6つ目の理論の逆転とは、現象が一般的に検討さ

れていることとは逆の方向に作用する状況を指している。理論は、ある物事が、なぜ、どのようにある方法で起こるのかを説明するために開発される。しかしながら、場合によ

研究の状況	研究領域		
	組織行動論と 人的資源管理論	経営戦略論	起業家論
創発理論：理論的な視点が未発達で、まだ生まれつつある状況	目的意識を持った仕事の行動 (e.g., Barrick, Mount, & Li, 2013)	リソースオーケストレーション (e.g., Sirmon, Hitt, Ireland, & Gilbert, 2011)	創造理論 (e.g., Alvarez & Barney, 2007)
新しい文脈：組織や個人が活動する際の新しい文脈や既存の文脈の変化	オンラインのソーシャルネットワークにおける個人の相互作用 (e.g., Ollier-Malaterre, Rothbard, & Berg, 2013)	組織検索のメカニズムとしてのクラウドソーシング (e.g., Afuah & Tucci, 2012)	起業活動の舞台としての eLancing 市場 (e.g., Aguinis & Lawal, 2012)
理論の借用：理論を別の領域または別の分析レベルから借用する	文化的変化に直面している個人に対するリツーリング概念の適用 (e.g., Molinsky, 2013)	個人の問題形成概念の組織への適用 (e.g., Baer, Dirks, & Nickerson, 2013)	個人と組織のアイデンティティ概念の新規事業への適用 (e.g., Fauchart & Gruber, 2011; Navis & Glynn, 2011)
クロスレベル効果：異なる分析レベルの変数が互いに実質的な相互作用をしているように見える	リーダーシップの謙虚さがチームレベルと組織レベルの成果にどのように反映されるか (Owens & Heckman, 2012)	組織の危機的な出来事に対する CEO と経営幹部チームの反応 (e.g., Pfarrer, DeCelles, Smith, & Taylor, 2008)	起業家企業の戦略的方向性を決定する際の創業者と取締役会の相互関係 (e.g., Garg, 2013)
理論的矛盾：ある結果を説明するメカニズムや構成要素について、相反する結論が存在すること	人材の採用・選抜プロセスにおけるテストの妥当性 (Aguinis & Smith, 2007)	外部の利害関係者の要求に対する経営者の解釈と対応 (e.g., Eesley & Lenox, 2006; Waldron, Navis, & Fisher, 2013)	起業家の情熱の役割 (e.g., Chen, Yao, & Kotha, 2009; Cardon, Wincent, Singh, & Drnovsek, 2009)
理論の逆転：現象が一般的に検討されていることとは逆の方向に作用する	職業的アイデンティティの喪失と回復 (e.g., Conroy & O'Leary-Kelly, 2014)	企業の組織アイデンティティの消滅 (e.g., Anteby & Molnár, 2012)	成功した新規事業の終焉 (e.g., Fisher & Kotha, 2014)

図表4. 理論の精緻化研究の実施方法：実施アプローチと戦術

出所) Fisher & Aguinis (2017, p. 454) を基に筆者作成

Fisher and Aguinis (2017) における理論の精緻化 (土屋佑介・久保雄一郎・林部由香・吉崎雅浩)

ては、期待されたパターンが崩れたり、逆になったりするのを観察することもある。なぜそのような反転が起こったのかを探ることによって、既存の理論の逆転や反転を検証し、既存理論をより精緻化することができるのである。

3. 理論の精緻化の実践と考察

3-1. 学会受賞論文の分類

2013年～2019年にかけての『組織科学』と『日本経営学会誌』の学会受賞論文のうち、質的研究9本を抽出した。次に上記の研究に関して、共同研究者で共有する Google スプレッドシートの表に問題意識、状況、理論的貢献、戦術を書き足した。分類にあたっては、第2・3・4著者が3本ずつ論文をまとめ、全ての入力完了後に第1著者が確認を行った。そのうえで、全著者でどの状況と戦術が妥当であるかを議論し、全員の合意によって図表5の分類表を作成した。

まず、各研究の問題意識について、どのような状況にあてはまるかを見してみる。最も該当したのが理論の逆転の4本、次いで理論の借用の3本、以下クロスレベル効果の2本、創発理論と理論的矛盾の1本が続く。なお、新しい文脈に該当する論文はないと判断した。

次に、各研究の理論的貢献について、どのような戦術を基に提案されているかを見してみる。最も該当したのが水平的対比の7本、次いで特有の関係の6本、以下、新たな概念の詳細の3本、概念の分離と順序関係の1本が続く。なお、再帰的關係と垂直的対比に該当する論文はないと判断した。

3-2. 分類に基づく考察

本節では、分類表を基に、状況として創発理論と新しい文脈に着目した研究が少ない理由、および戦術として垂直的対比と再帰的關係、順序関係に着目した研究が少ない理由を考察していく。

まず、状況として創発理論と新しい文脈に着目した研究が少ない理由として、ある程度の研究蓄積があり頑健な結果に上乘せする方が、若手研究者にとって研究しやすいことが挙げられる。いずれの学会賞も若手研究者が対象となる以上、独創的な研究であったり、制度や現象の変化が激しい事例であったりすることにためらいがあるのかもしれない。裏を返せば、ある程度の頑健な結果が出ている研究とは逆の方向に作用する状況が発見できたり(理論の逆転)、理論を別の研究領域や別の分析レベルから借りることで自らの依拠理論の限界を乗り越えることができたりする方が、自らの理論的貢献を意識しやすいからなのかもしれない。

次に、戦術として垂直的対比と再帰的關係、順序關係に着目した研究が少ない理由は、2つに分けることができる。1つは垂直的対比に関するもので、これも若手研究者にとってはためらいを感じやすいことが理由として挙げられる。第1筆者の研究テーマであるアイデンティティは、もともと個人レベルの概念であったが、組織レベルの活動を説明するために組織アイデンティティ概念が生み出され、応用されている (Albert & Whetten, 1985)。このような応用を若手研究者が行うことは難しいため、戦術として用いられることが少なかったのではないかと予想される。

もう1つは再帰的關係や順序關係に関するもので、時間を長くとった研究が少ないことが理由として挙げられる。清水 (2018) が Pierson (2004=2010) の「因果的説明の時間的射程」(邦訳, 105頁) の表を引用しながら、経営学やイノベーションの研究について「論文が取り扱う時間の幅が短い」と指摘している (85頁)。もちろん、兒玉 (2013) のように、時間幅を長くとることで、デジタルカメラより先にデジタルミニラボが導入され、デジタル写真の店舗プリントが可能になることで、消費者の行動習慣変化を抑制し、フィルム写真事業を展開していたラボの事業継続が可能になったことを示した例外はある。しかしながら、修士課程の2年間は、コースワークを受けながら2年間という短い期間に修士論文を書き上げなければならないため、じっくりと腰を据えて研究を行うことは難しい。さらに博士課程に進学後も、近年の「論文掲載至上主義」(佐藤, 2019, 23頁) のあおりを受け、質的研究よりも比較的短期間で仕上げることのできる量的研究が求められる向きがある。その結果、上記の戦術が少なくなったと考えられる。

以上の学会賞受賞論文において目立つのは、比較事例(水平的対比)を基にした分析である。加えて、水平的対比とセットで、既存理論では未検討な概念を特定する新たな概念の詳述や、既存理論では未知の構成要素間の関係や既知の關係の根底にあるメカニズムを特定して記述する特有の關係が多く用いられている。以上3つの戦術が多く用いられる理由は、限られた時間的制約の中で調査した事例を比較しながら、なんとか新たな概念やメカニズムという形で理論的貢献を見出そうとする若手研究者の苦心の結果なのかもしれない。

以上の分類を通じて、Fisher and Aguinis (2017) の理論の精緻化に対して、研究の熟達度合いによって戦術と状況を使い分ける必要性を主張したい。言い換えれば、若手研究者とベテラン研究者とで用いやすい戦術と状況が異なるということである。

3-3. アブダクションを使用した際のガイドライン

以上の考察を踏まえた上で、Fisher and Aguinis (2017) のガイドラインおよびアブダ

Fisher and Aguinis (2017) における理論の精緻化 (土屋佑介・久保雄一郎・林部由香・吉崎雅浩)

クシオンを用いて研究を進める場合、どのように用いられるかについて論じていく。特に、若手研究者にとって参考になるガイドラインを意識して、これまでの筆者の研究を参照しながら説明を行う。

まず、理論基盤が強固であり研究蓄積がある程度ある先行研究を選択する。この先行研究について、全体像を素早く把握する目的でスコーピングレビュー (cf. 土屋, 2021) を実施し、リサーチ・ギャップの「あたり」を付けておく。ここでいう「あたり」とは、Fisher and Aguinis (2017) でいうところの6つの状況が該当し、その中でも理論の逆転や理論の借用は学会賞受賞論文で多く用いられていたことから、「あたり」を考える際に有効となるだろう。

「あたり」を付け終えた後、特徴が極端に異なる事例を複数、比較して分析を行っていく。これは Fisher and Aguinis (2017) でいうところの戦術であり、特に学会賞受賞論文では水平的比較が多く用いられていたことを踏まえての分析をおすすめしたい。そして、分析の際は、新概念や概念間の関係メカニズムの特定に注力する。これは、Timmermans and Tavory (2012) でいうところの説明仮説や (たたき上げの) 理論に該当し、先行研究を問題化する上で必須となる (cf. 土屋・大野・辺見・田村, 2021)。そして、先行研究の問題化とは、先に「あたり」を付けるために実施したスコーピングレビューに自らが創出した新概念や概念間の関係メカニズムを位置づけるということである。

最後に、上記の分析過程を Gioia Methodology (Gioia, Corley, & Hamilton, 2012; cf. 土屋・辺見, 2020) に基づいて記述、表記することをおすすめしたい。質的研究では分析過程がブラックボックス化しやすいため、どのような生データやコーディングを経て概念が生み出されたのか、およびそれらの概念がどのような関係メカニズムにあるのかをボックスとアローダイアグラムで表記することで、分析過程の透明性を高めることが可能となるからである。

4. おわりに

本研究の目的は、理論の精緻化を提案した Fisher and Aguinis (2017) の議論を整理し、彼らのアイデアを基に日本の経営学の先行研究を分類することで、質的研究のガイドラインを提案することであった。

本研究の貢献は、理論を前進させる方法としてアブダクションを使用するための実行可能で具体的な一連のガイドラインを提供した点にある。調査で得られた驚くべき発見事実が、どのように先行研究と関連しているかを検討する際に、理論精緻化の適用に関する意思決定プロセス (図表3) に沿って理論の精緻化を進めることができれば、質的研究による調査は、「理論は理論、データはデータ」という形で両者が分離してしまう「分離エラー型」(佐藤, 2015, 35-36頁) に陥ることを避けやすくなるだろう。このことは、特に質的研究の経験が浅く、どのような理論的貢献を目指せばよいかわからなくなりやすい大学院生や若手研究者に対して有用なガイドラインであるといえる。

最後に、Fisher and Aguinis (2017) を基に理論の精緻化を行う際の注意点を3点言及しておこう。1点目の注意点は、過度に複雑な理論を生み出す研究につながる可能性がある点である。この対策としては、いわゆるオッカムの剃刀を意識することが挙げられるだろう。

2点目の注意点は、特定の文脈があまりにも特異的で、一般化可能性を欠く理論になる可能性がある点である。この対策としては、差異法・一致法を意識して事例を選択することが挙げられる。差異法とは「結果が異なる事例を並べて、要因の違いを探る」方法であり、一致法とは「同じ結果が起こった事例を並べて、それらに共通の要因を見つけ出すことで原因を探る」方法である (Van Evera, 1997=2009, pp. 59-60, pp. 86-87; 野村, 2017, 55-56頁)。事例選択の際に、何を根拠としているのかを意識するだけでも、あまりにも特異的な文脈を扱う危険性を回避することができるだろう。

3点目の注意点は、基礎となる理論が弱かったり欠陥があったりすると、精緻化された理論も弱くなったり欠陥が出たりする危険性がある点である。この対策としては、古典との関連を意識することが挙げられる。古典といっても、多くの文献が存在するが、大学院のコースワーク等で課せられる文献は代表的だといえるだろう。

謝辞

審査過程で査読者より貴重なコメントを頂戴した。この場を借りて感謝申し上げたい。また、本研究は JSPS 科研費20K13575の助成を受けたものである。

引用文献

- Albert, S., & Whetten, D. A. (1985). Organizational identity. *Research in Organizational Behavior*, 7, 263-295.
- Bacharach, S. B. (1989). Organizational theories: Some criteria for evaluation. *Academy of Management Review*, 14, 496-515.
- Bamberger, P., & Ang, S. (2016). The quantitative discovery: What is it and how to get it published. *Academy of Management Discoveries*, 2 (1), 1-6.
- Fisher, G., & Aguinis, H. (2017). Using theory elaboration to make theoretical advancements. *Organizational Research Methods*, 20 (3), 438-464.
- Gioia, D. A., Corley, K. G., & Hamilton, A. L. (2012). Seeking qualitative rigor in inductive research notes on the Gioia Methodology. *Organizational Research Methods*, 16 (1), 15-31.
- 野村康 (2017). 『社会科学の考え方 認識論、リサーチ・デザイン、手法』名古屋大学出版会.
- Pierson, P. (2004). *Politics in time: History, institutions, and social analysis*. Princeton: Princeton University Press (粕谷裕子訳『ポリティクス・イン・タイム：歴史・制度・社会分析』勁草書房, 2010年).
- 佐藤郁哉 (2015). 『社会調査の考え方 上』東京大学出版会.
- 佐藤郁哉 (2019). 「誰にとっての質？何のための卓越性？：論文掲載をめぐるゲームとゲーミングの構造」『組織科学』52 (4), 20-29.
- 清水洋 (2018). 「時間を長くとりませんか」『組織科学』50 (4), 85.
- Tavory, I., & Timmermans, S. (2019). Abductive analysis and grounded theory. In Bryant, A., & Charmaz, K. (Eds.), *The SAGE handbook of current developments in grounded theory*. (pp. 532-546), London, UK: Sage.
- Timmermans, S., & Tavory, I. (2012). Theory construction in qualitative research: From grounded theory to abductive analysis. *Sociological Theory*, 30 (3), 167-186.
- 土屋佑介 (2021). 「職業的アイデンティティ・ワークのスコーピングレビュー－文化心理学の視点から－」『大阪産業大学経営論集』23 (3), 47-62.
- 土屋佑介・辺見英貴 (2020). 「ケース・スタディの2つのテンプレート－Eisenhardt (1989) と Gioia, Corley, and Hamilton (2012) の比較検討－」『大阪産業大学経営論集』21 (2-3), 99-112.
- 土屋佑介・大野陽子・辺見英貴・田村祐介 (2021). 「Timmermans and Tavory (2012) のアブダクティブ分析－驚くべき発見事実を基に説明仮説を創り出す－」『大阪産業大学経営論集』22 (1-2), 27-41.
- Van Evera, S. (1997). *Guide to methods for students of political science*. Ithaca: Cornell University Press. (野口和彦・渡辺紫乃訳『政治学のリサーチ・メソッド』勁草書房, 2009年).
- Whetten, D. A., Felin, T., & King, B. G. (2009). The practice of theory borrowing in organizational studies: Current issues and future directions. *Journal of Management*, 35 (3), 537-563.

Fisher and Aguinis (2017) における理論の精緻化 (土屋佑介・久保雄一郎・林部由香・吉崎雅浩)

引用文献：日本経営学会誌と組織科学誌

- 岩尾俊兵 (2018). 「インクリメンタル・イノベーションと組織設計：日本の自動車産業における改善活動の実態とコンピュータ・シミュレーション」『組織科学』 52 (2), 70-86.
- 太田欣吾 (2013). 「自動車部品事業における技術統合の成立要件：エレクトロニクス導入時の企業行動の比較分析」『日本経営学会誌』 32, 30-42.
- 川崎千晶 (2014). 「組織間信頼の形成プロセス：縁故に基づく信頼の場合」『日本経営学会誌』 33, 40-49.
- 小阪玄次郎 (2014). 「専業メーカーと総合メーカーにおける技術開発体制：蛍光表示管業界の事例研究」『組織科学』 48 (1), 78-91.
- 兒玉公一郎 (2013). 「技術変化への適応プロセス：写真プリント業界における写真のデジタル化への対応を事例に」『組織科学』 47 (1), 40-52.
- 酒井健 (2020). 「組織の正統性修復における経営者の表情－期限切れ食肉事件の比較事例分析－」『組織科学』 53 (4), 64-78.
- 佐藤秀典 (2013). 「ルーチン形成における管理者の認識とパワー－自動車販売現場における管理者の役割－」『組織科学』 47 (2), 47-58.
- 谷口諒 (2017). 「シンボルを用いた資源獲得の成功による資源配分の失敗：『バイオマス・ニッポン総合戦略』の事例」『組織科学』 50 (4), 66-81.
- 平澤哲 (2013). 「ベンチャー企業の成長と組織アイデンティティの適応的な可塑性：持続性と流動性の意味のマネジメント」『日本経営学会誌』 32, 69-81.

